

カイラ・シュラー著／飯野由里子監訳、川副智子訳（明石書店、2023年）

ホワイト・フェミニズムを解体する インターセクショナル・フェミニズムによる対抗史

荒木 和華子*

本書は米国の19世紀から現在までのフェミニズムをホワイト・フェミニズム（以下、WF）とインターセクショナル・フェミニズム（以下、IF）に大別し、前者に対抗する後者を多様で理想的なフェミニズムとする「希望の」物語である。第一部は、19世紀に白人女性の活動家らが人種的他者の道徳的救済者を装い、実際には黒人や先住民女性の資源を利用し白人エリート男性同様の権益を白人女性に拡張しようとしたことを暴く。一方でインターセクショナル・フェミニスト（以下、I.フェミニスト）らを、多くの共同体メンバーのために闘ったヒロインとして描く。第二部では、WFが20世紀前半の生-政治で国民国家の質を「浄化」する役割を担い、現代では家父長制暴力から守るために国家権力と手を組むカーセラル・フェミニズムを展開しているとする。ここでもホワイト・フェミニスト（以下、W.フェミニスト）の他者排除と、I.フェミニストの相互尊重・包摂が対比的に語られる。第三部では、富と地位の二極化が急速に進行する現在、個人主義と新自由主義の寵児かつ最大の効率化の体現者である女性企業幹部のサンドバーグがWFの代表とされる。一方で、不平等な社会制度是正のためにボトムから闘うヒスパニック系政治家のオカシオ＝コルテスがIFのアイコンとして取り上げられる。最後に、WFは19世紀以来一貫してレイシストによる本質的な収奪行為であり、対照的にIFは有色のマイノリティが団結して「より多数のための」公平な資源再配分を目標とする「愛と信頼と配慮」の創造的運動であると結論づけられる。

本書の魅力は、BLM後に興隆した批判的人種理論の鋭い切り口を用いてフェミニズムに潜むレイシズムを暴くべく二項対立軸で約200年間のフェミニズムを分類し、搾取問題の責任を主流派フェミニズムに帰着させ、逆にIFを称賛している点

にある。歴史も社会構造も白人至上主義によって過度に漂白^{ホワイトウォッシュ}されてきた現実に思いを巡らすとき、マイノリティの政治のために本書の日本での出版に賛辞を送りたくなる。だが一呼吸して熟慮すれば、貴堂嘉之（2024）が「歴史学者としては許容できない単純化を孕んでいる」（37頁）と本書を批判したように、まさにこの単純明快な二項対立化によって重層的で複雑なフェミニズムが二極化され分断が促されるうえ、1989年にクレンショーが法的領域で提唱した交差性の枠組みを遡及的にラベリングするアプローチはあまりに粗雑で、歴史書としては疑義を抱かざるをえない。

まず本書は主にリベラル派白人フェミニストを抽出してWFの主人公としており、WFの多様性を見落としている。実際にはWF誕生の背景には奴隷制廃止主義や社会主義も存在していた。本書は二つのフェミニズム間の個人と共同体の対比を強調するために社会主義系のオカシオ＝コルテスを現代IFの代表とし、19世紀以来のWFの社会主義系フェミニスト多数を捨象しているが、これは恣意的操作と捉えられても仕方あるまい。また、そもそもホワイトと括られる内部も一枚岩ではない。アイルランド系が19世紀後半に白人性を確立したように、歴史上ホワイトの範疇を固定して語ることは不可能である。また米国で白人とされる奴隷制・黒人史研究者の多くはユダヤ人で、ホロコーストのアナロジーが研究動機であることが多いように、W.フェミニストの目的は必ずしも本書が主張するような主流派男性（の特権）に接近するリベラルで個人主義的なものに限られない。さらにWFの「生みの親はあくまでも中産階級のストレートの白人女性だ」（14頁、強調は評者）とあるが、19世紀のフェミニストの多くは女性間のネットワーク内で人間関係を構築して運動の思想を育み、しばしば親密圏をも形成した。つまり

* 新潟県立大学国際地域学部

今日の表現を取って用いれば、レズビアンでありクイアである当時のW.フェミニストは少なくなかったのである。リンカンのゲイ説が史料から一部の南北戦争研究者の間で周知の事実であるように、ストレートという言葉から想定される特定のパートナーとの関係性とマジョリティ性については時代ごとのより慎重な議論が求められよう。

WFの括られ方だけではなく、IFの美化・理想化も問題を孕んでいる。IFが「精神と身体と感情と魂の連合」(357頁)で、「その地平はわたしたちすべてをつなぐ生命の流れ」(358頁)である根拠を「非白人女性」の経験とする議論は本質主義に陥ってはいないだろうか。またIFの主人公のロマン化がマイノリティの偏見を助長している点も見逃ごせない。インターセクショナルリティが多様性のバズワードになったことを早くから指摘したヤスミン・ナヤーや、(本書がWF論で依拠する)ニューマンは3章の先住民女性のステレオタイプ化(原始人を自然存在とするロマンチックな神話化)された描写を問題視する(2023年4月15日、評者との私信)。ナヤーは「トラウマ・フェミニズムの危険」で本書を批判して警鐘を鳴らす。先住民女性の作家ジトカラ・サの功績が国家レベルで長く讃えられてきたにも拘わらず、ここでのフェミニズムの二分法はジトカラ・サの存在を忘却させるのである。

また米国で19世紀に誕生したフェミニズムの根にレイシズムが存在していたことと「女性の単一の歴史」というファンタジーの指摘は、本書のWF概念を支える重要な切り口の一つである。しかしこれはニューマンが1999年時点ですでに発表しており、本書に特段の新しさはない。1870年の憲法修正第15条制定により参政権が実質黒人男性にのみ付与されたことによって、以降のフェミニズムに白人至上主義的要素が加わったため、ニューマンは、第一波フェミニズムを

^{ホフ}「白人」女性^{ウイ}の権利^{スライツ}獲得の闘いと呼んだのである。

運動家の主張の背景や思想ではなく、「人種」により二分された属性(白人か非白人か)を基準に評価する本書の方法には賛否あろうが、敢えてこの方法をここでもしばし採用してみよう。本論は、WFは「自己陶醉の副産物であるにとどまらず害悪」(15頁)と手厳しいが、筆者シュラーはおそらく白人である。ニューマンも同様であり、本書がリベラル・フェミニズムの限界を指摘した点を評価している(前掲私信)。つまりWFに鋭いメスを入れたのは他ならぬ白人フェミニスト自身なのだ。彼女らが自らの属性の権力性を問題化し、自己批判による運動論を提示していることに対して、日本の読者はどのように受け止めるべきなのか。彼女たちに続いてナイーブにWFを弾劾することが日本での本書の真摯な受け止め方であるようには思えない。同様に非白人のフェミニストの真の敵がW.フェミニストなのかも問われるべきではないか。^{インクルーシブ}包摂を掲げる「より多数のための」フェミニズムが特定の属性の人びとに攻撃の刃を向ける運動の方法や実践は、根本的に論理矛盾をきたしてはいないだろうか。本書が、人種・ジェンダー史と発話の位置をめぐるこのように重要で不可避的な議論のきっかけとなることを願いたい。

参考文献

- 貴堂嘉之, 2024, 「社会史とジェンダー史の対話」『歴史評論』「特集/ジェンダー主流化と歴史教育」3月号(第887号).
- Newman, Louise Michele, 1999, *White Women's Rights: The Racial Origins of Feminism in the United States*, New York, Oxford University Press.
- Nair, Yasmin, 2022, "The Perils of Trauma Feminism," *A Magazine of Politics and Culture*, <https://www.currentaffairs.org/2022/12/the-perils-of-trauma-feminism> (2024年3月20日閲覧).